

大学院生に望む

玉川大学長 小原 芳明

20世紀終盤から始まった日本社会の高学歴化には、社会が求める高度情報の多さが背景にあります。新しい知識は次の知識を求め、その応用で出現した科学技術もさらに新しい知識を求めます。こうして過去から知識生産が行われてきたのですが、20世紀以来の知識生産速度はどんどんと加速されています。情報伝達技術の発展は新たに生産された知識の輪を地球規模で広げていますが、それがまた知識生産を早めるという相乗作用があります。科学全般においてどの国もナンバーワンを目標にしのぎを削っているのです。それが知識基盤社会です。大学院での修学は、そうした活動の基礎を担っているのです。

この時代においては、とかく古い知識＝無益な知識と捉えがちですが、既知の知識をより深く理解した上に、新しい知識と技術が生産されているのも事実です。そうした知識を「創造する機会」も大学院です。ここで求められるのは、師弟間の双方向知的活動への積極的参加です。それは単に知識を貰い受けるのではなく、知識を得るために自ら行動し、未知の領域に「一步前へ踏み込む」Proactiveな心構えを持つことです。本学が掲げている「第二里行者」の精神とは、まさしくプロアクティブな心構えのことです。

どの社会も、より良い明日を目指し、社会へ貢献できる人を必要としています。そして、いつの時代においても、社会はより良い社会を創り出せる人的資本の構築を求めているのです。日本は輸出できる地下資源に恵まれていません。わが国にとって人的資源がいかに重要であるのかを認識し、社会に貢献できる人間となるために、大学院での時間をどのように活用するのか。学習歴社会と知識時代に即した行動を取るか否かで、大学院は「機会獲得」にも「機会損失」にもなります。社会での活動目標を明確にし、ここでの活動が有意義な結果をもたらす絶好の機会としてください。